

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

東方ユーラシア馬文化の研究

A Study of Horse Culture in Eastern Eurasia

2. 研究代表者氏名

諫早直人

Isahaya Naoto

3. 研究期間

2021年4月-2024年3月(2年目)

4. 研究目的

東方ユーラシアの諸地域は、中国でさえも家畜馬や馬車の利用において先進地域ではなく、西方からの直・間接的な影響を受けて二次的に始まったことが明らかとなって久しい。またおおむね前1千年紀後半から後1千年紀前半にかけて、馬車から騎馬へと戦争における利用形態が大きく変化するとともに、家畜馬や騎馬の風習がそれまで認められなかった地域に急速に拡散していく。日本列島における馬の出現は、この変化の最終局面として捉えられる。このように個別の地域・時代に対して個々に進められてきた研究成果を紡ぎ合わせた概観は可能ではあるが、東方ユーラシアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現や普及、その後の展開のプロセスについて、資料の実態に即しつつも一貫した視野のもとに論じた研究はまだほとんどない。本研究は、こうした問題点に鑑み、中国・朝鮮半島・日本列島の馬車・騎馬文化と馬匹生産について、ユーラシア草原地帯と比較しつつ、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

It has long been revealed that Eastern Eurasia – including even China - came a late “second” to the West in adopting utilization of domestic horses and horse-drawn vehicles. From the latter half of the 1st millennium B.C. through the first half of the 1st millennium A.D., how people used horses in war changed drastically, from the use of chariots to riding on horseback. And the methods used in the domestication of horses and riding rapidly spread to new areas. The appearance of horses on the Japanese archipelago can be seen as the final phase of this change. Thus, it is possible to present a rough overview by connecting research results for individual regions and periods. However, there are few consistent studies on the emergence and popularization of domestic horses, chariots and horse-riding in Eastern Eurasia, and the subsequent development process, that are based on archaeological data. In light of these issues,

this study provides some clarity regarding equine culture and horse breeding in China, the Korean Peninsula, and the Japanese archipelago using archaeological materials and historical documents comparing developments in these areas with those on the Eurasian Steppes.

5. 本年度の研究実施状況

2年目にあたる本年度は、対面とオンラインとの併用により、計10回の研究会を実施した。定例の研究会では、文化人類学の視点から「文化の伝播と植生」の問題について、考古学の視点から「紀元前1千年紀末の馬上戦闘武器の変化とその意義について」「古墳時代の金属製馬具と有機質製馬具」「中国古代の車馬と弓形器」の諸問題について、文献史学の視点から「新出漢簡にみる馬と飼料」について班員による研究報告があり、それぞれ活発な討論がおこなわれた。また、それらに加えてゲスト研究者を招へいし、「チンギス・カン祭祀と馬」「重装騎馬戦術と仏像の成立・東漸」「古墳時代の榛名山噴火と馬」の考古学的研究、「近畿古代牧研究の成果と課題」にかんするフィールド調査と文献史学の成果、「ポルトガルの再野生馬の生態と社会」にかんする動物学的研究の成果を講演してもらい、班員との間で議論をおこなうことにより、共同研究の視野を大きくひろげることができた。

6. 本年度の研究実施内容

2022-05-27 文化の伝播と植生——家畜と栽培植物をめぐって 発表者 篠原徹 国立歴史民俗博物館・名誉教授

2022-06-10 紀元前1千年紀末の馬上戦闘武器の変化とその意義について 発表者 坂川幸祐 総合博物館

2022-06-24 チンギス・カン祭祀と馬 発表者 白石典之 新潟大学

2022-07-29 近畿古代牧研究の成果と課題 発表者 吉川敏子 奈良大学

2022-10-07 古墳時代の金属製馬具と有機質製馬具 発表者 片山健太郎 埼玉県立歴史と民俗の博物館

2022-10-21 ポルトガルの再野生馬の生態と社会——ドローンによる空からの撮影でわかったこと 発表者 平田聡 野生動物研究センター

2022-11-25 重装騎馬戦術と仏像の成立・東漸——暴力の制御装置としての世界宗教 発表者 桃崎祐輔 福岡大学

2022-12-09 古墳時代の榛名山噴火と馬 発表者 右島和夫 群馬県立歴史博物館

2023-01-27 新出漢簡にみえる馬と飼料——懸泉漢簡と胡家草場漢簡 発表者 藤井律之 人文科学研究所

2023-02-17 中国古代の車馬と弓形器 発表者 石谷慎 京都府立大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

昨年度の人文研アカデミーシンポジウムをもとにした一般向けの書籍として、諫早直人・向井佑介編『馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化』（臨川書店、2023年3月）を刊行した。

また、班長を代表とする科学研究費補助金（課題番号 18K01083）により、本共同研究の成果も兼ねて諫早直人編『牧の景観考古学—古墳時代初期馬匹生産とその周辺』（六一書房、2023年1月）を刊行した。

8. 研究班員

所内

向井佑介、岡村秀典、古松崇志、野原将揮、藤井律之

学内

吉井秀夫(文学研究科)、坂川幸祐(総合博物館)、大谷育恵(白眉センター)

学外

諫早直人(京都府立大学文学部)、中村大介(埼玉大学教養学部)、Joseph Ryan(岡山大学文明動態学研究所)、井上直樹(京都府立大学文学部)、石谷慎(京都府立大学文学部)、大平理紗(京都府立大学文学部)、伍雅涵(京都府立大学文学部)、森下章司(大手前大学文学部)、佐藤健太郎(関西大学博物館)、河野保博(立教大学文学部)、篠原徹(国立歴史民俗博物館)、青柳泰介(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)、片山健太郎(埼玉県立歴史と民俗の博物館)、妹尾裕介(滋賀県立琵琶湖博物館)、菊地大樹(蘭州大学歴史文化学院)、王含元(北京大学考古文博学院)、姜伊(四川大学歴史文化学院)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(1)	(2)	(3)	(4)		(5)	(6)	(7)	(8)
学内(法人内)	5	10		2	1		59		7	6	
		(1)					(6)				
国立大学	5	6		1	1	1	31		2	2	2
		(2)		(1)	(1)	(1)	(5)		(2)	(2)	(2)
公立大学	2	5	1	3	3	2	40	10	24	24	19
		(2)	(1)	(2)	(2)	(2)	(19)	(10)	(19)	(19)	(19)
私立大学	5	5		1			17		4		
		(1)					(2)				
大学共同利用機関法人	1	1					10				
独立行政法人等公的機関	4	4		2	2		10		3	3	
民間機関	2	2		2	2		4		4	4	
外国機関	3	3		2	2	2	7		6	6	6
		(2)		(2)	(2)	(2)	(6)		(6)	(6)	(6)
その他 ※											
計	27	36	1	13	11	5	178	10	50	45	27
		(8)	(1)	(5)	(5)	(5)	(38)	(10)	(27)	(27)	(27)

※「その他」の区分受入がある場合
 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員
 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	8		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名 (必須)	掲載 論文数 (必須)	掲載 年月日 (必須)	論文名 (必須)	発表者名 (必須)
1	牧の景観考古学—古墳時代初期馬匹生産とその周辺	1	R5.1	古墳時代の牧、三国時代の牧—朝鮮半島からのまなざし、朝鮮半島へのまなざし—	<u>諫早直人</u>
2	牧の景観考古学—古墳時代初期馬匹生産とその周辺	1	R5.1	牧のある風景—中国古代を手がかりに—	<u>菊地大樹</u>
3	牧の景観考古学—古墳時代初期馬匹生産とその周辺	1	R5.1	ヤマト王権の馬匹生産戦略—大和を起点に—	<u>青柳泰介</u>
4	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	戦車と騎馬—家畜化後の広域交流—	<u>中村大介</u>
5	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	東部ユーラシア草原地帯の馬と馬具—パジリク文化期と匈奴期の特徴ある2事例を中心に—	<u>大谷育恵</u>
6	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	中国古代の車馬	<u>岡村秀典</u>
7	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	牧馬の育成—中国古代養馬史の再構築—	<u>菊地大樹</u>
8	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	中国における騎馬の導入と展開	<u>向井佑介</u>
9	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	馬模型にみえる鞍の変化—北魏の後輪傾斜鞍とその広がり—	<u>大平理紗</u>
10	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	鐙の出現—騎馬文化東伝の原動力—	<u>諫早直人</u>
11	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	馬と塩—5～6世紀代の奈良盆地の事例を起点に—	<u>青柳泰介</u>
12	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	1	R5.3	古代東アジアの馬文化と植生	<u>篠原徹</u>

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
1	馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化	諫早直人・向井佑介編	R5.3	臨川書店
2	牧の景観考古学—古墳時代初期馬匹生産とその周辺	諫早直人編	R5.1	六一書房
3	馬に乗った加耶 加耶馬具特別展	諫早直人訳・監修	R4.12	国立金海博物館

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	2

13. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

新型コロナウイルス流行の影響により、班員旅費・招へい旅費などが使用できなかったため。

14. 次年度の研究実施計画

次年度は最終年度であり、共同研究の総括に向けて準備を進めていく。まず、今年度末に刊行した書籍『馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化』の書評・座談会を4月に実施する。前期の定例研究会では、班員による考古学・言語学の方面からの報告を予定しているほか、ゲスト研究者を招いて日本古代牧の立地と構造の研究、新羅の馬についての文献史学的研究、古代蝦夷の馬についての考古学的研究成果などを講演してもらう計画である。また、これまでに実施してきた共同研究の成果を国際的に発信するため、次年度末に中国の大学と共同で国際会議を開催する計画を進めている。年度後半は、国際会議の準備にあけるとともに、報告論文集の刊行に向けた準備を具体的に進めていく予定である。

15. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ人)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	5	30000円×5人	150000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費	1	150000円×3人	450000
	招へい旅費			
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				100000
消耗品等経費				50000
その他				
合計				750000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

菊地大樹班員の協力のもと、蘭州大学歴史文化学院との共催により、東方ユーラシアの馬文化にかんする国際会議を次年度末に実施する計画を進めている。また、その国際会議の内容と、定例研究会の研究成果をあわせて、研究班終了後に報告論文集を刊行する予定である。